

医工学治療とEBM

阿岸鉄三

板橋中央総合病院血液浄化療法センター

「医工学治療」は、本学会の前身である医工学治療研究会の発足へ向けた造語である。当時存在した類語の医用工学は、あくまで工学であり、工学になって新たな学際領域 (interdisciplinary field) が成立・誕生したと考える。医工学治療はあくまでも20世紀後半になって花開いた科学的技術を専一的に応用することを指向していたといえる。医工学治療の代表は、人工臓器を利用する医療である。同じく不全臓器の機能を代行する移植医療があるが、両者は補完的に利用されて相乗的效果を発揮できるとされてきた。人工臓器の新規開発研究は一段落、移植医療とその技術的分枝とも考えられる再生医療に開発研究の意欲・興味が向いているのが現代的趨勢といえるであろう。人工臓器・移植医療は、機能を代行の意味から置換医療と呼ばれたりするが、臓器の機能不全の問題から医療経済的・倫理的・宗教的問題などへのtrade-off(置換)と看做すことができ、新しい問題を露呈しているのが現況であるといえる。すなわち、医工学治療においても科学技術専一的では、もはや進展は望めなくなっている。

EBM(evidence-based medicine)は、わが国においては1980年代から厚生労働省の推進もあって医療のあるべき姿の中心概念となってきた。その理念は、経験主義を排し、科学的根拠に基づいた医療を行うこととされる。この基本理念に矛盾がある。科学は、実験、すなわち条件付けられた集団的经验から共通則を帰納的に抽出する思考によって導き出されるので、経験を無視する科学は存在しえない。また、補助技術として数学を利用することを特徴とし、数学的に表現できないものを非科学的として排除する。しかし、医療は、人格のある生命体を対象とする意識が現代では一層の高まりをみせており、人格の尊重は心身霊における自由度の確保として評価される。これらは、現代では数学的に表現し得ないとするのが社会通念であろう。とすれば、EBMは科学専一主義的視野からは理解されず、最近、諸外国において社会的関心を集めつつある統合医療的視野から理解すべきであると考えられる。

結論すると、現時点では、非科学的とされる視野をも取り込まないと「医工学治療におけるEBM」は成立しない。